

# 江戸時代後期における動物観に関する研究-鼠を中心にしてー

著者	安田 容子
号	9
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	学術(環)博第149号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/59073">http://hdl.handle.net/10097/59073</a>

	やすだ ようこ	
氏 名	安 田 容 子	
学 位 の 種 類	博士（学術）	
学 位 記 番 号	学術（環）博第149号	
学 位 授 与 年 月 日	平成24年3月27日	
学位授与の根拠法規	学位規則第4条第1項	
研究科，専攻の名称	東北大学大学院環境科学研究科（博士課程）環境科学専攻	
学 位 論 文 題 目	江戸時代後期における動物観に関する研究 ―鼠を中心にして―	
指 導 教 員	東北大学教授 平川 新	
論 文 審 査 委 員	主査 東北大学教授 平川 新	東北大学教授 瀬川 昌久
	東北大学教授 岡 洋樹	

## 論 文 内 容 要 旨

### 研究目的

鼠は、古来より人と多様なかかわりを持ち続けている動物である。本研究においては、都市部に住む人々と鼠とのかかわりのなかで、鼠に対する動物観がどのようなものであるかということの問題とする。現在ドブネズミ、クマネズミ、ハツカネズミと分類される家ネズミを中心に、都市における人々と鼠との関係から、江戸時代の日本人の鼠に対する動物観の一端を明らかにしようとするものである。動物観とは、人の動物に対する興味や関心のことであり、ある集団において共通する、動物に対する意識のことであり、人と動物との関係を論じる上で、動物観は重要な概念である。また、江戸時代後期は、錦絵や川柳が隆盛した時代であり、これらの作品には、動物が描かれ、詠み込まれていることが多く、特に多様な鼠の表現がみられることから、動物としての鼠と人との実際のかかわりや、そのかかわりに対する人々の意識について、絵や物語だけでなく、随筆や考証における鼠の表現を対象にしている。江戸時代の人々が鼠をどのようにみて、それをどのように表現したのかという、江戸時代後期における人々の鼠に対する動物観の一端を明らかにすることを目的とする。

本研究は、第一部において動物としての鼠の認識と名称づけ、第二部において信仰の中での鼠、第三部において鼠の飼育愛玩、第四部において物語における鼠イメージについて考察を行った。

### 第一部 江戸時代における鼠の分類と名称

江戸時代における、動物としての鼠の分類と認識について、『和漢三才図会』等の百科事典類における分類と、各地の産物帳における分類をみることで、鼠の名称付けの特徴を明らかにした。江戸時代中期に成立した百科事典類においては、『本草綱目』をもとにした分類と名称付けが行なわれていた。一方で、江戸時代中期に各地の産物について編纂された産物帳においては、『本草綱目』には載らない名称が用いられており、山や野など鼠の生息地にもとづいた名称であった。しかし、19世紀になると、産物帳や地誌においては、それぞれ「鼠（ねずみ）」、「鼯

鼠（はつかねずみ）」「鼯鼠（じねずみ）」と、百科事典類と同様に『本草綱目』の漢字名に対して共通する和名が定着し、明治時代の図鑑の分類にも引き継がれていった。19世紀に編集されたシーボルトの『日本動物誌』には、これらの『本草綱目』にもとづいた名称は用いられず、江戸時代中期の産物帳と同様に鼠の生息地にもとづいた名称が見られたが、「ちゃいろねずみ」のように毛色にもとづいた名称も記されていた。日常における、鼠の名付けの方法は、『本草綱目』や百科事典類における名称とは異なった、住み処と大きさによる名付けであり、19世紀には、毛色にもとづいた名称が登場したことが特徴であった。

## 第二部 信仰のなかの鼠

大黒天の使者の鼠は白鼠に限らなかったが、18世紀後半には、大黒天と白鼠は強く関連づけられ、白鼠は大黒天の使者として富貴をもたらす存在としてみなされていた。鼠は、「大黒→北方=子の方角→鼠」の連想から、大黒天と結びついていった。江戸時代中期には、福神としての大黒天信仰が盛んになり、各家で甲子祭が行なわれる中で、鼠に対しても福神の使者として富貴性を見るようになった。

大黒天を信仰する日和佐玉英の著作『鼠』（明和7年[1770]刊）と『大黒天神像考』（安永7年[1778]述）は、大黒天の使者として鼠を霊獣としてみていること、さらに、家の鼠を殺さないことで家内繁昌へと結びつくことを説いている。18世紀後半における、大黒天信仰と鼠に対する意識として特異な意見であるが、家にいる鼠を殺さず、餌を与えたりする、「愛養」すべきとしていることが特徴的であった。

白鼠に対する、大黒天の使者というだけでなく、富貴をもたらす存在というイメージは、江戸時代中期以降にみられた。『奇異珍事録』（木室卯雲、安永7年[1778]成立）巻五「福鼠」にみられるように、白鼠が金をもたらすものとしての認識が、江戸時代後期には定着し、白鼠の富貴性が人々の中に広がると、家の中で見かける白鼠に対して、愛玩の対象としてみるようになり、飼育へとつながっていったと考えられた。

## 第三部 白鼠の愛玩飼育と奇品の誕生

鼠の愛玩と利用という点からみた人と鼠とのかかわりは、18世紀後半において特徴的なかわりであった。白鼠の富貴性と、大黒天信仰や開帳が流行していたことを背景に、18世紀後半には、白鼠の飼育愛玩が流行し、多数の白鼠が販売されるようになった。信仰から飼育されていた白鼠は、愛好家達によって量産され、斑鼠などの奇品もつくり出されるようになったことで、白鼠は子供の愛玩物として定着していった。

18世紀後半に刊行された、2冊の鼠の飼育書は、鼠の飼育方法だけでなく、当時産出された突然変異体について言及していることが特徴である。このうち、先に刊行された『養鼠玉のかけはし』（春帆堂主人述、安永4年[1775]刊）は、鼠の分類と、当時産出された奇品について、狂歌を交えて紹介している。鼠の愛好家である養鼠家は、財力を持った人物であり、鼠の取引も行なっていた。奇品についての狂歌が寄せられていることから、奇品鼠の産出には、当時の大坂の狂歌師、一本亭芙蓉花とその一門がかかわっていた。狂歌師の新しい試みのひとつとして奇品鼠が取り上げられていた。

鼠の突然変異体である奇品鼠については、つくり手においても、奇品の産出は自然に任せる

ようにすべきであり、異なる毛色のものをかけあわせてはいけないとするように、鼠の愛玩飼育流行の初期には、品種改良に対する躊躇がみられた。

西村遠里（1717-1787）は、『居行子後篇』（安永 5 年[1776]跋、安永 8 年[1779]刊）巻四「白鼠の辨」において、かつては稀な存在であり、大黒天の使者として貴ばれていた白鼠を人々が顧みなくなったことや、人為的に斑鼠などの奇品鼠を作り出す行為が盛んに行なわれることについて、「造化の功を奪う」行為として批判している。西村遠里の考えは、自然界における奇異なものについては、「造化の不測」として認めているが、その奇異なものに夢中になり、人の手によって繁殖を管理することは、批判される行為と見なすものであり、特徴的な意見であった。鼠飼育流行の最中に刊行された『珍玩鼠育草』（天明 7 年[1787]刊）が、かけあわせによる奇品の産出についての詳しい観察記録であるように、品種改良に対する否定的な意識は顧みられることなく、様々な斑鼠が作り出され、奇品の品種維持につながったといえる。

#### 第四部 物語における鼠表現

鼠イメージについて、江戸時代前期のお伽草子や仮名草子、江戸時代後期の黄表紙や読本を対象に、挿絵や本文に描かれた鼠の表現を考察することで、鼠イメージの時代による相違を明らかにした。家の中で器物や衣類を害するやっかいな害獣、また福神の使者として富貴を有する存在という二つのイメージが江戸時代を通して物語において共通する鼠イメージであった。さらに、白鼠は福神の使者として富貴を人にもたらす存在としてみられていた。

18 世紀後半の黄表紙においては、『鶉の白拍子』（伊庭可笑作、北尾政演画、天明元年[1781]刊）のように、白鼠の飼育流行や斑鼠の誕生を取り上げた作品があり、白鼠飼育流行が物語における鼠表現に影響を与えていた。斑鼠もまた、鼠の一種として認識されるようになり、白鼠が富貴や金銀をもたらす存在としてだけではなく、愛玩動物として人に利用される価値のある存在として認識されるようになった。また、斑鼠の登場により、毛色への注目が高くなり、擬人名は鼠の生態にもとづいたものではなく、毛色にもとづいたものが中心となっていく。

白鼠や斑鼠が富貴をもたらす存在としてみられる一方で、黒い鼠や通常の鼠に対しては、鼠害をもたらす存在としてのイメージが強くなり、通常の鼠は徹底した駆除の対象としてみなされるようになっていった。駆除の対象としてのみ意識される鼠は「どぶねずみ」と呼ばれ、富貴を有するイメージが付されることのない表現であった。

害獣としての鼠イメージが強くなる中で、19 世紀の読本や合巻においては、鼠は怪異をもたらす存在として登場するようになる。群れる鼠の表現は、単なる鼠害に留まらず、人命をも脅かす存在として怪談に登場する。怪異をもたらす存在としての鼠は、江戸時代以前より知られていた頼豪の怨霊による怪鼠の表現であり、巨大な怪鼠表現と無数の鼠による鼠害の表現が怪異として描かれていた。また、19 世紀には、歌舞伎『東海道四谷怪談』（鶴屋南北作、文政 8 年[1825]初演）などにみられるような小さい鼠の群による鼠害が怪異表現として表現された。19 世紀には、鼠は鼠害を及ぼすだけでなく、人命をも脅かす恐ろしい怪異をもたらす存在として位置づけられるようになった。

#### 結論

江戸時代における鼠の表現においては、①害をもたらす存在、②富貴を有し、時に人に富貴をもたらす存在、③愛玩の対象、の 3 つのイメージをみることができる。江戸時代の人々は、

鼠について、大きく「鼠」として認識していたが、その大きさや住み処から、家ネズミに限らず、野ネズミも含んだ詳細な分類と名称付けを行なっていた。百科事典類においては、『本草綱目』における分類にもとづき、『本草綱目』による漢字の名称を用いているが、和名は、鼠の生息場所や大きさにもとづいた名称である。物語における擬人名においても、習性や行動が読み込まれており、家ネズミに限らず、野ネズミについても、注目し、観察していたといえる。

江戸時代後期における鼠とのかかわりについて特徴的であったことは、鼠の愛玩飼育と斑鼠の産出が行なわれたことである。て毛色によって分類して認識するようになった。また、斑鼠の登場により、愛玩動物としての斑鼠というイメージが定着した。品種改良による斑鼠の産出という行為について、飼育者の中に戸惑いがみられ、批判的意見も存在したが、実際には、品種改良が行われ続けたことで、現代にいたるまで、斑鼠が維持し続けられることにつながった。

また、鼠害をもたらす存在であることと、富貴を有することの二面性のイメージについては、鼠に対して、江戸時代を通して人々が抱いていた意識であった。白鼠は富貴をもたらす存在、また通常の鼠は害を及ぼす存在というように、鼠の飼育愛玩の流行を契機に、鼠に対する動物観には、新しく、毛色によって鼠を見るという動物観が加わったことが 19 世紀の鼠に対する動物観の特徴である。さらに、白鼠や斑鼠に対しては愛玩動物としての価値が付されるようになった。一方、通常の鼠に対しては、鼠害を及ぼす存在としてのイメージが大きくなり、19 世紀には、ドブネズミのように下水溝から台所へ侵入する鼠に注目が集まり、鼠に対して、富貴を有する存在としてよりも、有害な存在としてみなすようになったといえる。

# 論文審査結果の要旨

本論文は、人と動物の関係を、とくに鼠を対象に分析し、主として文献や絵画などにみられる鼠の表現や鼠との関わり方などに着目して、鼠観の歴史的変化を明らかにすることを目的とした。

第1部「江戸時代における鼠の分類と名称」を扱った第1章「江戸時代中期における鼠の分類」では、10世紀から18世紀における鼠の分類や名称付けを諸種の文献から検討し、中国の「本草綱目」や日本の「和名抄」の影響が大きいことを確認した。第2章「江戸時代後期における鼠の分類」では、19世紀後半になると鼠の大きさや色だけではなく、生息場所による名付けの違いが登場することを明らかにした。第2部「信仰のなかの鼠」の第1章「大黒天信仰と鼠」では、江戸時代において鼠が大黒天の使者や神獣とみられていたことを検討し、第2章「白鼠に対する信仰」では、室町時代から江戸時代にかけて、とくに白鼠が富貴をもたらす存在として尊ばれたことを明らかにした。第3部「白鼠の飼育愛玩と奇品の誕生」の第1章「白鼠飼育の流行と愛玩」では、18世紀に白鼠の飼育と販売が始まることや、子供や遊女たちに愛玩される傾向があったことを明らかにした。第2章「鼠の品種改良と奇品の産出」では、鼠の飼育書を分析した結果、飼育愛好家が掛け合わせによって奇品を産出し、狂歌師と版元などが連携して絵入り飼育書を販売して鼠ブームをつくり出していたことを明らかにした。第3章「鼠の奇品産出に対する批判」では、行き過ぎた品種改良を自然の摂理に反するとして批判した言説も存在したが、主流にはなりえなかったことを指摘した。第4部「物語における鼠表現」の第1章「江戸時代前期における物語の鼠」では、主として江戸時代前期のお伽草紙や仮名草紙を対象に、害獣イメージや富貴イメージが混在していたことを指摘した。第2章「黄表紙の鼠－白鼠と斑鼠」では江戸時代後期に流布する黄表紙での鼠表記に注目し、鼠が登場する作品の多いことを指摘すると共に、白鼠だけではなく斑鼠も愛玩の対象となり、鼠に芸を仕込む傾向がでてくることを明らかにした。第3章「黄表紙の鼠－鼠害」では、飼育対象にならないどぶねずみが悪役として描かれ、福をもたらす存在としての白鼠とは対蹠的に認識されるが、猫との戦いにおいては白鼠や斑鼠と共に同一の鼠軍として扱われていたことを明らかにした。第4章「読本にみる鼠の怪異表現」では、鼠の怪異表現が平家物語に発し、江戸時代には歌舞伎や読本において怪異表現が多様化していく有様を検出した。

以上、本論文は、古代から江戸時代にわたる多くの文学作品や絵画などを渉猟して鼠の表現を抽出し、そこから人間と鼠の関係の変化を明らかにした。とくに18世紀後半の鼠の飼育繁殖の流行が人々に新しい鼠観をもたらし、愛玩の対象となっていたことなど、鼠観の時代的变化を浮き彫りにしており、鼠を対象にした動物観研究としてユニークな内容になっている点は高く評価できる。

以上のことから、著者は自立して研究活動を行うのに必要な高度の研究能力と学識を有することが明らかである。よって、本論文は博士（学術）の学位論文として合格と認める。